毎週月曜日更新

カタカタ通信

第２２５号
２０２６年4月２０日

「托卵作戦は、大変の巻」

昨年に引き続き、今年も托卵（たくらん）を行いました。托卵といえば、カッコウや夏の夜に鳴きながら飛ぶホトトギスがいます。

今回も、多摩動物公園より有精卵を３卵いただいて、６人で輸送しました。輸送中は専用の携帯孵卵器を１人が持ち、その前後左右を囲んでガードします。公共交通機関を使っての輸送なので、人や物にぶつかったり、急な動きになったりしないよう、それぞれ周りを見渡しながら歩きました。傍から見ると、少し不思議な光景だったかもしれません。電車の乗り換え時も、揺れを最小限にできるよう、階段ではなくエレベーターを使いました。

携帯孵卵器で輸送開始

電車内での持ち方のレクチャー中

電車の中では孵卵器を持つ人は椅子に座って抱えます。座っている間も、膝の上に防振クッションを挟んではいましたが、手で少し持ち上げて

支えつつ乗りました。膝の上にあるとはいえ、孵卵器は決して軽くないうえに、中には大切な卵があるので気は抜けません。

移動中の揺れも計測

ここから選ばれた3卵を移動

なぜこんなに大変な思いをして運んでいるかというと、輸送中の振動で、卵の中で育っている血管が切れないようにするためです。孵卵器には震度計もつけてありました。どのくらいの揺れがあったか、数値化して記録に残すことで、未来の輸送に役立つと思われます。

多摩動物公園で用意していただいていた卵は５つ。そこから３卵を選びました。硬いまっすぐなテーブルの上に有精卵を置くと、かすかに動きがあります。これは卵の中でヒナが動いているということです。近くに寄って、真上から見ないとわかりにくいほど、小さな動きでした。より元気な卵を…ということで、動きのわかりやすいものから選びました。

天空の里についてからは、暗室で光を当て検卵をしましたが、３卵とも同じように見え、発生の差ははっきりとはわかりませんでした。

大事に輸送してきた卵を空と花の巣に入れると、２羽ともしっかり抱卵してくれました。

孵化予定日が近づき、いつ孵化するかとドキドキしながら観察していました。一方で、心配もありました。選抜した卵の産卵日に間があると、孵化日も離れてしまう可能性があります。もし１卵目と５卵目だったら、１０日程度の差があるかもしれません。成長にも差が出てしまうので、近い頃合いで孵化してくれるといいな…と思っていました。

３卵の今後は、また次回のお話。

ぱちっ

天空の里　鴻巣市コウノトリ野生復帰センター

飼育担当：最長老